風景

山口　英

その上にあぐらをかいていた奴はもういない
草ぼうぼうで風が吹いている

四百年むかしから
石にはさまれていた石仏や墓石は
そっくりそのままだ

すこしすりへったが苔さえはやして
おなじ顔つきで
じっとこらえている

（一九七四）

(7)

城の石垣のあいだに石仏があった
ひとつふたつではない
あっちこっちにはさまれていた

あおむいたり
うつぶせになったり
なかにはよこむいているのや
さかだちさせられているのもいた

石がたりないので
石とみればかきあつめてつみ上げたんだろう
一人二十個さしだせとおどされて
わが家の墓石までひっぱってきた奴もいたという

(8)

乳母車がとまっている
ぎん色の手すりが

こどもの首につきささっている
ぬれたような頭ががくんとかたむき
顔が赤い口だけになる
ちいさな手がなにかをつかもうとする
おとなたちはどこにもいない

そんなはずはない
しずかな五月の昼さがり
ニッポンのこどもは笑ってばかりいる

（一九七四）

(9)

地下鉄にのると
いっせいにこちらをむいた
やっぱり男ばかりだ

さっきおりたバスのなかも
たしかここへくるまで出あったのは
男ばかりだった

たぶん偶然だと思っていた
だが思いだしてみると
けさから女には一人も出あっていない

女はどこへいったのか
何かにおしだされるように
次の駅でおり
階段をかけ上った

女をみたい
ビルの回転扉をあけると
なんと女ばかりだ
いっせいにこちらをむいて笑っている

むこうの鏡の中のぼくも
女になっていた

（一九七四）

ある疑問のとばくち

――中本弥三郎氏のことから――

寺島珠雄

(1) ガリバンの『選集』

『中本弥三郎選集』第一巻・小説という本がある。一九五七年四月刊行でB6判三〇四頁、箱入り――と書いてくれば、ちょっとした体裁の本が想像されるだろう。事実ちょっとした本でないわけではない。しかし、箱から出した正味の〝ツカ〟が三センチという厚さのこの本は謄写印刷で出来ている。

都合よく、手近にB6判三〇四ページで厚表紙カバー付の本があるので、活版印刷のそれの〝ツカ〟も測ってみた。二センチである。つまり、ガリバンゆえの文字の大きいことと、紙質の関係で『中本弥三郎選集』は活版でページ数の等しい本より一センチも厚くなっているのである。

そのことからぼくは思うのだが、ガリバンの本ができたとき、著者中本氏もまた、ぼくがしたような活版の本との比較をしたのではないだろうか。そして痛憤や悲哀や悔恨や、錯綜するさまざまな感情を深く噛みしめたのではないだろうか。

詩の場合だと、ガリバンゆえのよさ、味わいといったものを備えさせる意味で、わざわざガリバン詩集を作ることがあり、成功例も多い。しかし小説では、ガリバンと活版の差は埋めがたく歴然としてしまう。それがわかっていて尚、中本氏はガリバンの自家版選集を、しかも全十巻の計画で発足させた。させざるを得なかった――。

(2) 略歴など

中本弥三郎氏とはどんな人か。

選集の奥付に出ている「著者略歴」を全部ここに転記

する。中本氏自身が書いたものに相違ないので、略歴は中本氏の自己評価の一斑でもあるわけだ。

（著者略歴）明治三十四年四月大阪市に生る。幼少から未明を愛読（註・未明は小川未明）、十七歳で入門、くんとうを受けた。二十五歳「改造」に懸賞当選、二十四歳東京日日新聞入選、昭和七年短篇集「ルンペン時代」により浩二、逸枝に認められる（註・浩二は宇野浩二、逸枝は高群逸枝）。大阪外語卒（前）毎日記者、東京警視庁、大阪府、同府立寝屋川高女講師、日本百貨店組合関西駐在員（現）新日本文学会員、児童文学者協会員（著書）小説集ルンペン時代、父をたずねる、街頭詩集、評論集浪漫派の人生創造、童詩感覚等がある。大阪市住吉区粉浜中之町三丁目三七に居住。

以上が一九五七年四月、選集刊行時までの中本氏の略歴だが、ぼくとしてはまだ付け加えたいことがある。

引用した略歴のほかに、ぼくは中本氏の名を何度か見聞している。

たとえば、一九二九年二月から十二月の間に七冊を刊行した第一次『黒色戦線』創刊号に、中本氏は戯曲「山の家」を、二号には小説「鐘を叩く」を発表している。

またぼくは小野十三郎さんの年譜を作っている必要で小野さんの回想談を時々聞くようにしているが、そのなかに、一九三五年ごろの大阪で、小野さんや中本氏が『順風』という同人誌を出した、ということがある。『順風』の現物をみていないので年次は不確定だが、当時小野さんの近くに住んでいた菊岡久利（鷹樹寿之介）さんも同人だったと聞いている。

さらに一九四一年三月に出ている『関西文学』という同人誌（いま大阪にある同名の同人誌とは無関係）をみて、三色刷りの表紙のついた活版百十二ページの堂々とした雑誌が、中本氏を中心的な存在として発行されていたことを知った。

もう一つ、関西の戦后アナキズム運動を推進した向井孝の話では、戦后もはやいころ、中本氏から向井あてに何度か来信があったという。

こうみてくると、中本弥三郎という人が、太平洋戦争以前、昭和初期のアナキズム文学の一角に活動し、戦後のアナキズム運動にも関心を寄せたことがおぼろげながらわかってくる。

ぼくが『中本弥三郎選集』第一巻を杭瀬（くいせ）の古本屋で、まだ値付けしてないのを発見して手にとったのは、それだけの予備知識があってのことだった。しかし、ぼくは手にとったものの買わずに帰り、どうという気もなくその話を久保利明にした。すると足マメな久保

は翌日ぼくに地図を描かせて杭瀬に行き千円を投じて買ってきた。いまぼくは久保の買ってきた本と自分の手持ち資料によってこの文章を書いているのである。

貸してくれる時、すでに通読した久保の感想はこうだった。

「はじめはいいですよ、真ン中もね。だけどおしまいのにはムカついたな。千円損したような気分ですよ」

この『イオム』を読む人は多分知っているだろうが、久保はガリバンの個人紙『ヤジウマ』また『ヤジウマ改題x』を発行し、目下はその終刊号の原紙を切っている。そしてそのあとで、こんどは雑誌『ムセイフ』を出すのだと、そっちの方の原稿は岩田秀一やぼくなどから早々と捲きあげている。（雑誌の名のムセイフは、すぐ連想する無政府ではなく、かといって夢精夫なんてものでもなく、とにかく久保は漢字を当てるらしいがぼくはそのむつかしい漢字を覚えていない）

で、話は久保の『中本弥三郎選集』に対する感想に戻るが、ぼくはその感想を『ヤジウマ改題x』の終刊号なり『ムセイフ』創刊号なりに書くことをすすめた。しかし、彼はメンドくさいという。ならば代りにではないが、ぼくはぼくなりに『中本弥三郎選集』第一巻から得た感想を少し広げて書きとめておきたくなった。

『選集』には、奥付とウラ表紙とカバーと箱と合計四個所も「自費出版一〇〇冊限定」の旨と予定は全十巻であることが記されているが、失礼な想像をすれば、第一巻だけしか出ていないような気がしてくるのである。またぼくは前に出した同人誌『順風』のことを知りたいので、略歴に示された粉浜の中本氏の住所へハガキを送ったが、それは転居先不明で戻ってきている。ここにまた悪い想像をすれば、七十四歳になる中本氏が果して健在かどうかも危ぶまれるわけで、もしこの文章が中本氏の現況を知る人の目にふれたら、お手数でも一報をねがいたいのである――と挿入して本題へ進む。

(3) 作品をたどって

『選集』巻頭には掌篇とでも呼ぶべき「カミソリ」という小説がある。

長屋ぐらしふうの一家三人、その男の子にデキモノが出来たのを、医者に見せるカネがなくて父親がカミソリで切開し、翌朝には子供が死んでいたというものだ。デキモノが子供の体のどこにできたのかも、父親の職業が何かも書いてなくて、そんな角度からはこしらえもののオハナシ的とも見えるが、しかし雰囲気としての現実味

は醸し出されている。そしてこの掌篇の発表は一九二七年七月の『自由聯合新聞』である。

『自由聯合新聞』の創刊がいつだったかをいま明らかにできないが、一九二六年五月の全国労働組合自由聯合会（全国自聯）の結成を考えれば、おそらくはその少しあとということだろう。全国自聯＝純正無政府主義派、日本労働組合自由聯合協議会（日本自協）＝アナルコ・サンジカリズム派の分裂後も、『自由聯合新聞』は純正無政府主義派の側に存続し、ぼくは一九三二年二月発行の分までは、とびとびにだが見たことがある。

そういう性格の新聞に中本氏は小説を発表していた。

また『選集』には「こおろぎの記」という八章五五ページの中篇があるが、その冒頭は次のように書かれている。

――そのころ私は、岡下（一郎）や里村（欣三）と三人で、立ちんぼうをやって、口すぎをした。

岡下、里村の名はいわゆるプロレタリア文学雑誌のハシリである『文芸戦線』にしばしば現われ、特に里村欣三は『文芸戦線』の歴史に不可欠な一人である。一九四〇年代になって名乗り出るまで兵役忌避を通してきたと聞く里村にとって、中本氏や岡下との立ちんぼう生活は兵役を忌避した当初ごろであったろう。

三人は東京の九段坂下で立ちんぼうをやったそうだが、これは荷を積んだ手曳き車（大八車）が坂をのぼる時に助っ人になって賃金というよりは心付けをもらう稼業である。

三十歳以前の中本氏が、最下層の労働生活をしながら文学への志向を持ち、志向の色合いが反逆的であり、アナキズムに近距離というかアナキズム周辺というかであったことがこうしてわかるわけだ。

推測するにすぎないが、宇野浩二や高群逸枝が賞讃したという一九三二年刊の短篇集『ルンペン時代』も、「こおろぎの記」に描かれた時期と重なる内容ではなかったろうか。そしてその頃まで、中本氏の志向の色あいは変化することなく保たれていた（に相違ない）のではなかろうか。「はじめはいいですよ、真ン中もね」とぼくに告げた久保利明の感想もこの推測に見合ってくる。

尚、この「こおろぎの記」は一九五二年九月に『短篇小説』という雑誌に発表されたことが著者の註であきらかである。

それから三篇をはさんで、久保が「ムカついた」という作品が出てくるのだが、その前に三篇のまんなかの「土地収容令」に少しふれておきたい。

作中の人物が「中本」という「土地収容令」は、私小

説と呼ぶよりむしろ記録で、浅香山にあった家が府によって強制収容される話である。現在のように補償金問題で訴訟に持込むなどのことはなく、家屋の解体も自分でやって、一家五人が南海電車の難波駅から南の方へ、あらたに住む借家を探して歩くところで終っている淡々たるものだ。しかし、一九四〇年十一月に書いて『関西文学』の、おそらく創刊号に発表したこの小説には、「特高注意受く」と著者自註がある。収容令に抵抗した記録ではないのだが、こうした題材自体が、明るくも建設的でもないとして官憲の好まぬものだったに相違ない。

ぼくが持っている『関西文学』は一九四一年三月発行の第二巻第二号で、月刊制ではなかったらしいから通巻でも第二号、つまり「特高注意受く」の小説を発表した次の号のようで、そこに中本氏は「新体制と国民生活」という随筆を書いている。

バルザック、トルストイ、ドストイエフスキイ、メレジュコフスキイの名が出てくるこの随筆はだが文学論的ではなく、いわゆる大東亜戦争が年末には開始される年の新年風景などから、当時の物価、民衆生活の実体に遠慮がちなペンを及ぼして次のような結びになっている。

―そして更にひしがれた貧しい人の心の中に、新体制にのぞみをかけて今年の逞しい精神が芽生えるのではないかとも希望しているのである。

前年十月、大政翼賛会が発足し、その総裁を兼ねた首相近衛文磨を頂点とした「近衛新体制」が、満洲事変以来の宣戦なき戦争つづきのなかで、何か明るさめいた幻想を人々に抱かせた一九四〇年一月に、中本氏はこう書いた。それはやむを得ぬことであったとぼく程度の年令（当時ぼくは満十四歳六ヶ月だった）の者には諒解がつく。一方に大政翼賛会の発足があった前年中には、次のようなことが起っているのだ。

反軍演説の民政党代議士斉藤隆夫の処分をめぐって社会大衆党分裂／社会大衆党解党／政友会解党／日本労働組合会議解散／民政党解党／大日本農民組合解散／町内会・隣組設置。

中本氏がかって接近したアナキズムなどはすでにこれ以前、運動としてはまったく潰滅していたのである。市井の生活者が、生きるために世情の新しい流れに身をまかせて行くのは、他の方途を採り得ぬ以上必然なことというしかなかった。新時流に従った生活の中でどの程度まで自己内面の積極的転回があったかなかったか、問題はほとんどここにしぼられてくる。

そして、残念なことながら、久保が「ムカついた」というその感想に通じるものを、ぼくもまた、同じ形容で

はないが中本氏に対していわざるを得ない。『選集』の終りから二つめに収められている「皇子とルンペン ―秩父宮殿下と私」という一篇にその根拠はある。

(4) 「皇子とルンペン」の問題

―秩父宮（雍仁親王殿下）が亡くなった。

中本氏の「皇子とルンペン」はこう始められている。冒頭のこの一行だけで、中本氏の経歴をみてきた者にはある感じが起ってくる。（ ）のなかで「親王殿下」と書いている敬意の、アナキズムとの不似合いさである。さらに五行おいて、次のようにも書いてあるので、不似合いさは、従って不似合いな文章を書く中本氏の内部の転回のさまは一層あきらかになる。

―人為で寿命はつくし難いというけれど、日本の人間として位最高をきわめ、天皇陛下についての仕合せ者は、秩父宮とも言えるであろう。

ここでは天皇制が肯定されている。また、政治的に保守の側にあるものすら天皇の戦争責任などまったく無視して、諷刺としてではなしに天皇を最高の「仕合せ者」としている。一九五三年四月に書かれたこの小説の僅かな戦后らしさは、もと「神」であった天皇やその弟に「日本の人間として」という形容をしたことだけで、文脈を流れているのは、天皇を「神」といい「至尊」と称した時代の考え方である。

少なくもアナキズムに至近距離的な作家ではあった中本氏は、いつ、何を契機にこうした内部転回をとげたのか。『選集』一冊ではそこまではわからない。

「皇子とルンペン」を読むと、その点でむしろ不可解さが生じてくるのだ。

―どういう運命の組合せかは知らぬが、私は秩父宮と私との一ヶ月にわたる生前のめぐり合せを浮べた。

さきの二つの引用の中間にはこうあって、それは大阪の高槻工兵隊に配属された陸軍将校の秩父宮に、毎日新聞記者としての中本氏が取材上接近したことなのだが、時代は一九三一年、接近は接近でもじかに会話をまじえたりのことは許されぬ時である。中本氏も警衛陣の外側から、一般の民衆よりやや近く秩父宮を眺めていたにすぎない。そして小説は眺めていたあれこれを、毎日新聞記者だったことの自慢をまじえて綴っただけのものである。

引用した文章ではじめから失望しながら、それでもぼくはまだ期待して読み進んだ。中本氏が秩父宮に対して、何か人間としての共感をおぼえて小説を書いたのか、敬

語や比喩の不適当はペンのすべりか、と思ったからである。しかしぼくの期待はむなしく終った。

中本氏は作品のなかにこう書いている。

―秩父宮が亡くなってから、私は感情こめて、この「皇子とルンペン」を書きだした。

―転々と流浪したルンペンの私が、秩父宮を思うのは、一個の「人」でありたいからである。

だが「感情こめて」はともかく、人としての秩父宮はまるで描かれていない。土台、人間的接触の片鱗もなく、伝記的関心の深まりも見られない秩父宮を人として描くということが、中本氏には無理な話だったのだ、こうぼくは断定せざるを得ない。

そして残ったのは、一九二七年当時『自由聯合新聞』に執筆し、一九三二年『ルンペン時代』を刊行して宇野浩二や高群逸枝に認められたという中本氏が、そうしたアナキズムとの至近距離時代の中間である一九三二年に、大新聞の皇族担当記者であったことを誇らかに回想している事実だけだ。

皇族担当記者だったことは職業の配置としてそれでもいい。だが、その時、アナキズムに近づいていた中本氏の思考や感覚はどう働らいたのだろうか。敬語たくさんの記事を書いたにがにがしさが回想されるのがまず普通だし、小説としては敬語と警衛の垣に隔てられた秩父宮の人間性というものが（かりに存在したとして、中本氏が観察し得たのなら）描かれていなくてはならない。

―秩父宮が亡くなった一月四日の朝、私は至情をこめて、勢津子妃宮殿下に、悲しみの文章をしたためた。

そしてこの、おそらく叮重の極みであったろう悔みに対して「雍仁親王殿下葬儀委員長松平康昌」という名で礼状が届き、中本氏はそれを額に入れて飾った。小説はそこで結ばれている。

「むべなる哉」という古風な言葉の好きな友達をぼくは持っているが、その真似をすれば、ムカついたという久保利明の感想はまことに「むべなる哉」とすべきだろう。

そういう小説を一九五三年に書いている中本氏が、戦後のアナキズム運動に関心を示して、関西における推進者の一人だった向井孝に何度か通信しているというのがぼくにはわからない。

くどいようだが一つの要約をしておく。

一九二七年『自由聯合新聞』執筆、一九三一年大阪毎日新聞記者として秩父宮担当、一九三二年短篇集『ルンペン時代』刊行、そして戦中は論じないとしても、戦後のアナキズム運動への関心と「皇子とルンペン」執筆で

ある。さきにぼくは転回といったが、これは転回ではない。ジグザグである。二律背反的である。

ぼくには中本氏をアナキストと断言する根拠はない。ないがしかし、くり返しているように至近距離にいたこともあると見るのは不当ではなかろう。

そこでわからなくなるのだ。

アナキズム、またアナキストやそれに近縁な人々にとって、天皇制とか皇室とか皇族とかは何なのか？ということが。

もちろん、ぼくはすべてのアナキストやそれに近縁な人々に対して一様な疑問を抱いているのではない。

代表的には石川三四郎、「天皇ヒューマニズム」を唱えなどしてはっきりと右翼に転じた菊岡久利、「大御親神の心もて凝視めて立てるを見よや」と死の直前の作品を結んだ萩原恭次郎。これらの人々のことをぼくは思うのだ。

疑問を抱きながら、ぼくは自分の接した石川さんの人柄にいつもなつかしさを感じているし、菊岡久利、萩原恭次郎はそれぞれに好きな詩人として読み返している。

だから一層わからなくなる、ということでもある。その、平常のわからなさを、偶然手にできた中本氏の『選集』をとばくちに書いてみたので、これは中本氏には不愉快な文章かも知れない。けれども幸いにして中本氏が健在なら、不愉快は不愉快として、ぼくが疑問としていることに答えていただけるとありがたい。

おねがいします。

（七四・五・一三）

大阪の〝カラケシ騒動〟

河本　乾次

〝カラケシ騒動〟、この奇妙な名称の事件は、大阪のことならどんなことでも精通している物識り仲間でも、いぶかしく首をかしげることであろう。この事件を〝カラケシ騒動〟と名づけることは当を得ていないかも知れぬが、架空の物語でなく、実際に発生したことである。遺憾なことには、この事件発生の確実な年月日、関係者の人名、肝心の内容、経過の記録ノートを紛失して終っているので、具体的に記述できないことになっている。また、「イオム」誌に載せる以上、アナキズム運動との関連を問われると、これもまた証拠立てるものがなく、かっての関西のアナキズム運動の中で、この事件が記録されておらず、未然に埋れていることになる。

そこで、これを発掘し、詳細に知る手段は残されてい